

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
庄内「春」
写真季行
庄内憧憬
谷川賢作 ピアニスト

【クレードル】出羽庄内地域文化情報誌

3

2020 March/April
TAKE FREE
NO.58

Cradle 3

美しくつかしい、日本をのせて。
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2020 March/April
令和2年3月1日発行(隔月第2回発行)第10巻4号(通巻58号)

発行：Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株)株式会社 出羽庄内地域文化センター 電話0236(64)0888
制作：Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3(コア)フューチャーラボ「ジョウ」 電話0234(41)0012



鶴岡市／松ヶ岡

春うららかに 出羽庄内の桃源郷

 庄内銀行

「渡り鳥ミュージシャン」としては、これからも
つかずはなれずお付き合いさせていただければ幸いです。

庄内つかずはなれず 谷川賢作

実は日本のどこで公演があるうとも、ミュージシャンという仕事柄なのか、到着しリハーサルし公演し打ち上げし出発という流れができあがっていて、さあ数日滞在してこの地をじっくり味わうか、ということにはなかなかならない。今までに何度も訪れた庄内も短期滞在なのだが、なんとこの地に最初に縁をいただいたのは1986年、私が26歳の時の「酒田市立第六中学校校歌」の作曲の仕事「♪山なみのつらなるかなた みつめよう目に見えぬもの」(作詞は父、俊太郎)。まだ訪れたことのない庄内の自然に思いをはせながら自宅で作曲したが、思えばこの時「現地に行かないと作曲できません」とごねるべきであった。貴重な庄内体験を一回逃している。

そしてようやく実際にこの地を最初に訪れたのは99年、39歳の時。作家の新井満さんに声をかけていただいて「月山文学祭」に参加。父と歌手の高瀬麻里子さんと私の4人で、朗読と歌のコンサートを朝日中学校で行った。コンサート後には車で各地を案内していた

だき、ようやく庄内の風を存分に浴びたのだが、なんといつてもこの時の鮮烈な印象は、湯殿山・注連寺で見た鉄門海上人の即身仏。鬼気迫る真っ黒な眼光鋭い人が放つ強烈なオーラにたじたじとなってしまい、当時の人たちの「ありがたい」と手を合わせる感覚を理解はできるのだが、ひ弱で贅沢に馴れた現代人の私は、生まれて初めて対面する即身仏に射すくらめられ、ただただ叱られているように感じて、心の中で何度も「ごめんなさい」とひたすら謝り続けていたのを覚えている。

2度目の庄内は2008年(48歳)フォークシンガルの小室等さんに連れられて、鶴岡と酒田のすてきなカフェでのライブ。楽しく気持ち良く音楽を奏で、愉快な人たちに出会い、おいしい食事とお酒をふんだんにご馳走になり、一体全体、前回の「ごめんなさい」はどこにいったのやら。刹那的で享樂的な私は再びの庄内を満喫した。

3度目は12年(52歳)広島に原爆が落とされた時、奇跡的に焼失しなかった「被爆ピアノ」が広島から搬送されてのコンサートがやはり鶴岡と酒田で開催され、弾きに行った。不勉強な私は、終戦間際に東北の地、酒田にまで空襲があったことをこの時初めて知り、驚いたのを覚えている。

そして、昨年(59歳)再び小室さんに声をかけていただき、庄内町・響ホールでデュオコンサート。この時の驚きは、翌朝案内していただいた「KIDS DOME SORAI」。子どもたちが「ひたすら自由自在に遊ぶ」ことだけを考えて作られたこのアイデアあふれる施設と出合えたことは大きな喜びで、渡り鳥ミュージシャンとしては、全国各地でこの庄内発信のSORAIを自慢したいと思う。

駆け足な庄内体験報告になってしまったが、これからもつかずはなれずお付き合いさせていただければ幸いです。また次の再訪でも新鮮な驚きが待っててくれるはず。



Cradleコンサート「谷川俊太郎を歌う、谷川俊太郎を弾く」でギター・歌の小室等さんと。(2019年12月11日、庄内町文化創造館 響ホール)

たにかわ・けんさく／ピアノリスト。1960年東京生まれ。ジャズピアノを佐藤允彦に師事。演奏家として、現代詩をうたうバンド「Divide」、ハーモニカ奏者続木力とのユニット「バリヤーン」、父である詩人の谷川俊太郎と朗読と音楽のコンサートを全国各地で開催。80年代半ばより作・編曲の仕事を始め、映画「四十七人の刺客」、「龍馬の妻とその夫と愛人」、NHK「その時歴史が動いた」テーマ曲を手がける。88、95、97年に日本アカデミー賞優秀音楽賞受賞。音楽を担当した最新映画「のさりの島」(監督・山本起也)、「僕は狼猫になった」(監督・川原愛子)、「おかあさんの被爆ピアノ」(監督・五藤利弘)が全国公開予定。
オフィシャルサイト <http://tanikawakensaku.com/>

特集

庄内「春」写真季行

「この気もちはなんだろう」と繰り返し問いかける
谷川俊太郎さんの「春に」という詩をよんでいると
始まりは終わりをはらむ、その命を生きていることに
熱く静かな脈動を自分の中に確認します。
辺りを見渡せば、草木や風、鳥や魚たち、それぞれに
春を生きる姿が見えます。今回の「写真季行」はそうした
自然の中にライフワークを持つ4名の皆さんに、
春を感じる風景を綴っていただきました。

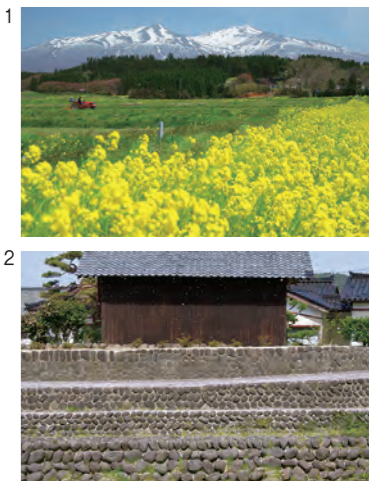
出典：谷川俊太郎著「谷川俊太郎少年詩集とさん」(理論社 1980)

桜の名所、遊佐町の中山河川公園から望む鳥海山。
晴れた日には残雪の白さが青空に映える。(撮影／梅津勘一)



雄大な鳥海山を望む桜堤の景観は、地域の人々が作りあげた無二の絶景

1. 菜の花の咲く頃、トラクターの音が聞こえ農作業が始まる
2. 現地の石で築かれた美しい石積みの護岸
3. 清流と石積護岸と調和した桜堤、喧騒とは無縁の静けさこそが魅力



庄内の桜の名所の中でも、私が毎年心待ちにしているのが遊佐町の中山

河川公園の桜である。その魅力はまさに無二の絶景。露店も並ばず、宴会の混雑もない、凜とした美しさがある。残雪の鳥海山と澄みきった洗沢川、美しい石積みの護岸や落ち着いた家並みと桜堤。それらが見事なまでに調和した景観を愛でるために人々は訪れる。川面を渡る風、せせらぎの音、鳥の声、花吹雪、田んぼを縁取る菜の花・・・それらを目と耳と肌で感じれば、他には何もないのである。

ほとんどお金は落ちない。観光客に媚びないその姿勢がまた魅力である。昭和34年4月に皇太子（平成天皇）ご成婚記念として地区民によって植栽された60本のソメイヨシノは、今年61年生の壮齢木である。ソメイヨシノは伝染性の「てんぐ巣病」にかかりやすいことが宿命であり、腐朽も入りやすく、世の中には満身創痍の衰弱した桜が実に多い。その点で中山の桜は、自然な樹姿と樹勢を保ち、根張りもしっかりして空洞を抱えたものもない。日照や枝張り空間などの生育環境の良さ、障害物による枝や根の切断などが少ないこ

梅津勘一さん

庄内の宝ともいうべきこの桜堤

梅津勘一さんは庄内浜の砂防林をはじめ

庄内一円の樹木の健康を守り続けている樹木医さん。

毎年桜の時期になると欠かさず訪れ撮影している

遊佐町の洗沢川「中山の桜堤」について綴っていただきました。



梅津勘一（うめつ・かんいち）
1957年生まれ、酒田市在住
樹木医、北庄内森林組合勤務。
日本報道写真連盟会員。



とが好条件になっている。それでもてんぐ巣病や大枝の腐朽、枯枝の発生などの問題は少なからずあり、良好に管理していくことは本当に大変であろう。そして昨年の春は、以前より花付きが少なくなった印象を受けた。今年はどうのような花を付けるか気がかりである。

桜こそ適切な剪定や施肥が必要であり、手をかけただけ花は応えてくれる。例えば武家屋敷のシダレザクラで有名な秋田県の角館地区には、国指定名勝「檜木内川の堤」がある。2 km続くソメイヨシノの並木は、今から86年前の昭和9年に皇太子ご誕生記念として植樹されたが、高い管理技術と知見により、今なお見事な花を咲かせ、国内外から大勢の観光客が押し寄せる。中山の桜堤も規模は小さいが景観の見事さでは引けを取らず、角館に比べればまだ若い。適切な管理を続ければまだまだ寿命は伸ばすことができる。庄内の宝ともいうべきこの桜堤を、ぜひ後世に残していきたいものである。

てんぐ巣病／糸状菌（かび）の一種によって起こる伝染病で特にソメイヨシノに激しい被害を起こす。病状は枝の一部がこぶ状に膨らみ、ここから小枝が箒状に群生し、いわゆる天狗の巣を形成する。病巣には花は咲かず、美観も損ねる。放置すると病巣は年々大きくなり、周りの健全部に伝染して増え、次第に木全体がてんぐ巣化する。



1

1. 豊かな生物多様性を維持している谷地(庄内地方北部)。一方で、周辺では耕作放棄が進み、かつては3つがいのサシバが繁殖していたが、現在は1つがいとなっている。
2. ヤマアカガエルを捕らえたサシバが水田脇の立ち枯れ木に戻る瞬間(遊佐町)。
3. なくなりつつある素掘りの水路がサシバ繁殖地には残されている。ドジョウやカエルの他、ここではトウホクサンショウウオの産卵も見られる(酒田市)。

農家の朝は早い。春分も過ぎると日の出は5時半頃。中山間地の水田には早朝から素掘りの用水路を手入れする翁の姿が。彼らによって丹念に管理された里山に「ピックイー・ピックイー」と春を告げる声がこだまする。

声の主はサシバ。冬季を東南アジアで過ごし、3月下旬頃に日本へと渡ってくる夏鳥で、タカの仲間、つまり肉食の猛禽類である。彼らは日本へ渡ってくると山間の水田にっがいで縄張りをつくり繁殖する。中山

のために日に40〜50回も狩りをする生活を1カ月以上続けなければならぬという。ヒナが巣立ちするまでに必要な餌量は1羽当たり5キロにも及ぶ。サシバの暮らす里山には、それだけ多くの獲物が必要なのだ。したがって、サシバは豊かな里山の自然の指標種となっている。

しかし今、サシバの好む「谷地水田」と呼ばれる環境は減少の一途をたどっている。谷地水田とは、林の斜面に挟まれた小さな水田が谷間に沿って細長く並ぶ地形のこと。こうした環境の減少は中山間地域の人口減少と関係が深く、谷地水田ほど耕作放棄されやすい。また、水田の生産効率を重視するがゆえの化学肥料・農薬の普及やほ場整備は、時としてさまざまな生物の減少を引き起こした。里山の生態系の衰亡はサシバにとっても死活問題。サシバは受難の時代を迎えているのだ。これは庄内地方でも例外ではない。将来、失われかねない里山の象徴を案じている。待ちわびた暖かい陽気に小川のせせらぎとカエルの声。そこへ「ピックイー・ピックイー」と今年もお気に入りの里山にサシバがやってきた。何物にも代えがたい幸せである。この里山を残してくれた先人、今もここに暮らす人々に感謝である。

獲物を狙い直進するサシバ。この後、水田の畔でハタネズミを捕らえた(酒田市)。



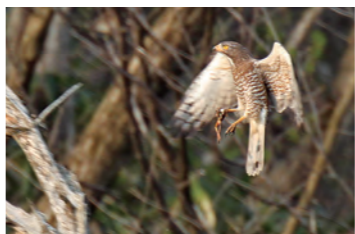
長船裕紀さん

豊かな里山といのちの営み

すっかり雪の消えた里山に、1羽の鳥を発見。タカの仲間の「サシバ」は、春に繁殖のため日本を訪れる夏鳥です。彼らが長旅をしてまで訪れるその場所は、生命をつなぐための場所。未来に残したい風景です。

間地域の人々の営みの中、水田に面した林の中に巣を設け、開けた場所でネズミやカエル、ヘビ、昆虫などの小動物を捕らえ生活するのだ。

林縁の広葉樹の枝から周囲を見渡すサシバ。水田を囲む畔を意識しているようだ。何かを凝視したかと思った瞬間飛び立ち、脚を突き出し地面に吸い付くように降り立った。すかさず元の枝に戻ると脚には獲物が握られている。冬眠から覚めたばかりの大きな雌のヤマアカガエルだ。サシバは捕まえたカエルをちぎりながら、たった3口で食べきった。この後、サシバは再び狩りに向かい、



2



3

今度はハタネズミを捕らえて再び同じ枝へと戻ってきた。

このようにサシバは1日に何度も狩りを繰り返す。特に子育ての時は大忙し。一説には3羽のヒナを育て

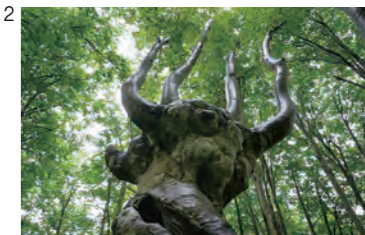
長船裕紀(おさふね・ゆうき) 1985年生まれ。岡山県出身。2012年に酒田市に転入。イヌワシ等の猛禽類に関連した環境行政に従事。ライフワークはさまざまな野生生物調査を通じた自然環境保全の傍ら、6次産業化による地域振興等、持続可能な自然共生社会の実現を模索中。庄内海岸いきもの調査グループ代表。日本鳥学会会員。





飛島法木地区のアラメ漁。飛島で採れるのはソルアラメである。ポリフェノールやアルギン酸などを多く含み、健康食品としても注目されている

1. 遊佐町女鹿の湧水「神泉の水」。磯で採ったアオサを洗う集落の女性たち
2. 鶴岡市 梳代のあがりこ
3. 鶴岡市田川で見た焼畑跡地に咲く菜の花



冬のため風がゆるむと、飛島ではギバサ、シヨゴモ、ワカメ、アラメなどの海藻を採る磯漁が始まる。

アラメ漁は春祭りの終わったおだやかな風の日に集落一斉に行われる。現在アラメの漁の「口明け」は年に2回ほどで、開始の時間とともに一斉に棹を海中に入れる。定められた漁の時間は午前中の2時間ほど。その間、磯船から箱メガネで海底をのぞきながら、長い棹の先に根曲がり竹を二股に固定した道具や、たも網に刃物を付けた道具を使って、各船が競い合ってアラメを採る。アラメは「荒布」と書く。その名の通りワカメに比べると葉がでこぼこしていて荒く、色も黒い。陸揚げ

したアラメは機械で細かく刻み、茅簀に広げて天日乾燥させる。昭和30年頃までは、「春のワカメ」のアラメ漁が終わると「五月船」と呼ばれた船を仕立て、海産物を本土の農村に持って行って飯米と交換する「物交」（物々交換）が行われた。飛島の人々はスルメや海藻類、塩辛などの海産物を農家に置いていき、農家が稲の収穫を終えた秋に再び船を仕立てて、米を受け取りに行った。「物交」の付き合ひのある農家は、庄内平野一帯から秋田県の旧由利郡まで広範囲にわたった。海から離れた農村にとって、田植え前に届く飛島の

岸本誠司さん 庄内の春 海山の自然と暮らし

籠もりの冬から解かれて、海の民も山の民も恵みを得るため営み、「墾る」の季節へと備えます。自然の中に居住まいする人々、その暮らしを追う民俗学研究者の岸本誠司さんが見た、庄内の春の日常です。

岸本誠司（きしもと・せいじ）
兵庫県出身。2005年に東北芸術工科大学に着任し、翌年から飛島のフィールドワークを続ける。専門は民俗学。2015年より島海山・飛島ジオパーク推進協議会主任研究員。酒田市文化財保護協議会委員。



海産物は「春の恵み」のひとつだった。こうした人と物の交流によって飛島の暮らしは成り立っていたのである。雪国に暮らす人は積もっている雪の変化に敏感だ。日中の暖気と凍りかけた雪が夜間の冷え込みで凍結し、かたい雪に変わる。3月も半ばになると、雪で埋まった山の中をたやすく歩くことができる。鶴岡市梳代では、かつて早春に集落から離れた奥山で炭焼きを行った。3メートルを超える残雪の上から突き出ているブナやミズナラの枝を伐り、雪原に「伏せ窯」をつくって炭を焼いた。このようにして伐られた樹は、幹の途中から枝を伸ばす「あがりこ」（薬）となる。あがりこが群生する森は不思議で、妖艶な雰囲気満ちている。

5月の初旬、旧温海町の幹線道路を車で走らせていると、山の斜面一帯が黄色く色づいていた。近づいてみると黄色い正体は菜の花で、その茎は赤いカブから伸びたものだった。ここは、前年に杉の伐採跡地を焼き、カブが栽培されていた場所である。国道345号は通称「焼畑ロード」と呼ばれ、藤沢カブ、田川カブ、温海カブなどの在来野菜が現在でも焼畑で栽培されている。焼畑の里ならではの春の風景だ。



1

1. まだまだ雪が残る春の羽黒山
2. 白く輝く月山に、羽黒山大鳥居が映える
3. 山伏修行に励む人たち

雪が解け、人の姿もまだ余りない羽黒山参道。樹齢350年を超える杉並木に広葉樹が入り混じる木立を望むと、観光客や参詣者で賑わう季節には見えない景色が遠く広がっている。4年前、ここで私は「諒宣」という山伏名を授かった。

私が出羽三山の修験道に初めて触れたのは、自ら羽黒山伏として山伏修行プログラム「Yamabushido」を外国人に提供している加藤丈晴（株式会社めぐるん代表取締役）氏から、作りたいと考えている。

ニュージールランド生まれの私が、なぜこんなにも出羽三山に魅せられるのか。それは山伏修行の存在に他ならない。日常生活から完全に切り離された山の中で修行をすると、純粹無垢な心で自然と遊ぶ感覚が蘇り、たくさんの発見と感動が得られる。そしてあるがまますべてを受け止める「うけたもう」の精神が培われ、日常生活に戻った時にも自分の人生を受容し、前に進む力となる。この数年の間に父が突然亡くなり、母の健康状態も思わしくない自分がこうして前向きにいられるのも、山伏として今を生きているからだだろう。それを私は人生に課題を抱えている世界中の人たちに伝え、体験してもらいたい。今を生きる力にしてみらいたい。そのくらいの力を出羽三山は持っていると感じているからだ。

冬に蓄えたエネルギーが地表に出る時を静かに待つ羽黒山の春。この時期に参道に足を踏み入れると、私はいつも山の大きいなる可能性を感じ、胸が高鳴る。（談）

秋の峰入り／毎年8月下旬から7日間にわたって行われる羽黒山伏になる資格を得るための入門儀式。擬死再生の儀礼を現在に残す山伏修行として、現在は出羽三山神社による神式と、羽黒山荒澤寺による仏式の2つが行われている。

バンディング・ティムさん
大いなる可能性を
感じる羽黒山の春
その眼に、羽黒山の春はどのように映っているのでしょうか。

東北公益文科大学で英語を教えながら、出羽三山の山伏として四季折々の山の姿を発信しているバンディング・ティムさん。

外国人記者への通訳を依頼された平成28年のことだった。それを機にドイツやフランスからの修行取材に同行するようになり、翌年8月末には出羽三山神社の「秋の峰入り」で本格的に修行を開始。山伏名を拝受後は、丈晴氏と一緒に大聖坊の星野文紘先達のもと、山伏修行を求めて羽黒山を訪れる世界中の人々に修行プログラムを提供している。

同時に行ってきたのが、出羽三山の歴史や文化をウェブなどで英語発信する活動だ。平成30年9月には、同年5月に発足した「出羽三山門前町プロジェクト」の活動の一つとして



2



3

てサイト「Dewasanzan.com」を立ち上げ、以来、取材や勉強を重ねて得た情報を世界に向けて発信している。いずれはこの情報をまとめ、海外の人たちの役に立つガイドブック



Timothy Buring [山伏名「諒宣」]
1988年 ニュージールランド生まれ
2010年8月、ALT（外国語指導助手）として庄内町に赴任。酒田市在住。東北公益文科大学助教、株式会社めぐるんサブプロジェクトマネージャー、出羽三山門前町プロジェクトメンバー。通訳と翻訳のフリーランスとしても活動。

2446段を登って羽黒山山頂へ。ちょうど日の光がさし込んできた



まるい食品の My Dish こんにやく 黒蜜だんご

化学調味料・合成保存料
合成着色料・合成香料不使用で
なんとも画期的な
羽黒・庄内こんにやく100%の
ローカロリースイーツ、登場

昨年4月、驚きのスイーツが庄内に誕生した。羽黒・庄内産のこんにやく芋をだんごに見立て、特製黒蜜ダレに絡めて食べるというものだ。

製造販売を手がけるのは、昭和27年の創業以来、こんにやくを主軸に豆腐などの商品も作ってきた鶴岡のまるい食品である。黒蜜だんごは3代目を引き継いだ伊藤久美社長が、こんにやく芋の生産実績がほとんどない庄内で、オール庄内産のこんにやくを作りたいと動き出したことが発端となった。平成24年、鶴岡市の協力をもとに羽黒町の生産者と羽黒山麓でこんにやく芋の栽培を開始。失敗を繰り返しながらも生産者仲間を増やし、生産力が高まってきた29年に「庄内こんにやく芋生産組合（齋藤力代表理事）」を発足した。さらに同年、鶴岡工業高等専門学校も参画し、現在は畑の土壌を分析・研究し、質の良いこんにやく芋をより多く、安定的に栽培できる庄内の産地化に取り組んでいる。

同時に進めてきたのが、この努力の結晶を用いた新商品開発である。従来のイメージを覆す、添加物不使用の「健康美食」。このテーマをもとに、鶴岡在住の料理追求家、海藤道子さんと1年がかりで商品開発に取り組んだ。そして完成したのが「My Dish こんにやく」シリーズである。「黒蜜だんご」もそのひとつ。玉こんにやくの失敗作から生まれたという専用のこんにやくは、プリプリ・コリコリ食感と、白玉だんごのようなもちもち感が共存し、そこに三温糖のやさしい甘みと黒蜜の深いコクが絡まって、見事に新感覚のスイーツとなっている。未知の味わい、ぜひ体験あれ。



「My Dish こんにやく」シリーズは、黒蜜だんご、コーンスープリゾット(右)、スパイシーキーマ(中)、トマトスープリゾット(左)、グリーンアヒージョ、油淋蒟(ゆーりんこん)、和だしスープ粥の7種。本社での直販、公式オンラインショップでの販売のほか、庄内観光物産館と東京駅の地産品ショップ「のもの」などで取り扱っている。

<https://www.marui-g.co.jp/>
まるい食品株式会社 ☎ 0235-22-4520

(取材・文 長谷川結)



春の海



暮坪の棚田から海を望む

春立つ 暮坪を歩く

一日の中でも晴れていたかと思えば
たちまち冬雲に覆われ時雨れる。
立春を迎えたその日、
春の日差しに誘われ海へ向かった。

季語
春立つ
(はるたつ)
春になる。立春の日を
迎える。

のが、この立岩だと伝えられている。

早春や道の左右に潮満ちて

— 石田波郷

鼠ヶ関から加茂までのおよそ15キロは岩
石海岸で、暮坪の他にも「中波渡の立岩」
や「三瀬の立岩」などが美しい景観を成
す。毎冬、大寒の頃には波の花ロードと
なる日もあるが、今年は暖冬のために見
られない日が続いた。



暮坪の立岩

あつみICから国道7号「おぼこおけ
さライン」に入り北上すると、海の色は
もう冬の終わりが近いことを告げていた。
まもなくすると日本海に直立した堂々た
る奇岩が目飛び込む。高さ51メートル、
天然記念物の「マルバシヤリンバイ」が自
生する「暮坪の立岩」である。
真冬には怒濤の高波が打ち付けるが、
5〜6月には可憐な白い花が見られる。
かつて、武内宿禰が蝦夷征討に暮坪の地
までやってきた際に、敵の矢から守った

「暮坪の立岩」のすぐ先に「塩俵岩」と
芭蕉句碑がある。元禄2年(1689)
春、門人曾良を連れて「おくのほそ道」の
旅に出た芭蕉は、旧暦の6月半ばに象潟
から酒田を経て26日に温海に1泊、翌日
鼠ヶ関を通って越後に向かった。

あつみ山や吹浦かけて夕涼み

— 松尾芭蕉

暮坪の棚田は「やまがたの棚田20選」の
一つで、海を望む棚田は県内では唯一と
いう。どこからともなく根なし雲が気ま
ぐれに現れた。波の音と近くの雪解け水
が春の音を奏でる。春泥に足元を取られ
視線を落とすと、水がきらめきを増してい
た。田に草が生い始め、色を添えている。

立春のひかりを重ねたる棚田

— あへ小萩



芭蕉句碑

国道から道標に沿って棚田に向かうと、
枯れ野の中にさみどりの露の臺が日向
ぼっこをしている。やわらかい日差しの
中、枯木の枝がその影を優しく足元に伸
ばす。振り返れば遠くに粟島を眺め、ど
こまでも続く海の青、空の青。海と空と
棚田がつくり出す景色を独り占めした。

この時季は季節が行きつ戻りつの日を
繰り返すが、不思議なことに春はいくら
早く来ても嫌われることはない。この辺
りは田に水が張る頃、夕日と水田と海が
一体化する景となるという。収穫の秋に
は、畦に並ぶ稲架を楽しむことができる。
季節ごとに足を運びたくなる場所である。

立岩の根方にはやる春怒濤

— 水内慶太

立春の翌日から一変して冬に逆戻りし
た。あんなに待ちわびていた春なのに、
冬らしい冬が来てほっとしたのは、四季
の移ろいを感じながら暮らしているせい
かもしれない。いや、感じながら暮らせ
ることは幸せなことなのだ。
春はすぐそこまで来ている。



露の臺